

① ディレクトフォース

最初の田中伸夫さんによる講話は、今まで聞いたことのないような国内外のエネルギー事情、課題についての話題であった。私が特に興味を持ったのは2つだ。

1つ目は、今後の日本の原子力発電の在り方についての話だ。国内でも原発の使用については意見が大きく分かれている。私は国内で報道されるニュース等を見て、「原発賛成」の立場であった。しかし、田中さんの話を聞いて自分の視野の狭さを痛感した。田中さんは東日本大震災の福島原発事故は **humanerror**、すなわち、人災だという見方が国際的に強とおっしゃっていた。これは私も聞いたことがあった。実際、同じく東北太平洋沿岸部にある宮城県女川原発の被害が大きく無いことから、そのように考えられる。しかし、ここからが私の考えていなかったことであった。そのような考えを示す外国(先進国)は、既にバイオテクノロジーの普及が進んでおり、原子力に頼りすぎない考えが国内でもあるべきだというものだ。今まで国内で報道されるニュースにしか目を向けていなかった私は、諸外国のエネルギー、発電方法についての知識はほとんどなかった。そのため、単に原発問題を国内に置き続けるべきか否かのみで考えていた。今回の話を聞いて初めて、それだけでは無く、新しいエネルギーを用いた発電方法で代替する等の様々な視点からの考えを持つ必要があると感じた。

2つ目は、国内外問わず、エネルギー問題を他人事にしないということだ。これからの社会を支える世代として、直接エネルギー関係の仕事に就くか否かは関係なくだ。IEA で発表された多くの資料を今回見ることができた。欧米では確実に、日本よりも新エネルギーの利用について実行に移している波が強いと知った。アメリカは、国内の石油の発掘もあり、将来的には中東からの石油の輸入を全く必要としないのだそうだ。日本は国内で化石燃料を生産出来ないこともあり、アメリカのようにすぐには自然エネルギーを主に用いた発電を普及させることは難しい。未だに中東から大量の石油を輸入する必要がある。しかし、中東の治安は安定せず、突然原油価格が高騰したり、全く輸入が困難になったりしてしまう可能性は否定出来ない。いつ自分たちがその被害を被るか分からない。世界情勢の変化の情報をしっかり取ることが大切だと思った。

次の DF では、田代さん、安達さん、前川さん、青木さんの4人の方々からそれぞれ貴重なお話を伺うことが出来た。

田代さんは、日本財団で国内の社会課題に対して社会福祉等を主に行う仕事をされている方だった。民間だからこそ、集中的に分野を決めて、スピーディーに支援や寄付が出来ることにやりがいを持たれているように感じた。

安達さんは、ブラジルやロンドンといった長期間の外国駐在を経験された方だった。特に外国人と関わる上で気を付けていた事を伺えた。「宗教や言語のギャップがある時こそ、固定概念は持たずに自分の意見ははっきりと伝える、伝えようとするプロセスが重要だ」とおっしゃっていた。

前川さんは、アメリカでの生活が長く、現在はアジア太平洋の安全保障を目的とする海洋政策研究所で仕事をされている方だった。多くの言語を学ばれている方で、「何事も好奇心が大切、知識はその後に付いてくる。」という言葉が印象的だった。

青木さんは、私たち高校生が今やるべき事をたくさんおっしゃってくれた。社会変化を自分で調べ、知り、多くの失敗から学びを得る大切さを改めて知った。「同じ石に2度つまづくな」という言葉はとても心に響いた。

やはり、世界で活躍されている方の話はどれも面白く、心に響くものばかりだった。興味を持ったものはとことん自分で調べ、学びを深めるチャンスを取る必要があると痛感した。まずはこの高校生活で「失敗を恐れずに何もしない」のは避けたいと考えるようになった。

②企業大学訪問

私たちのグループは8月4日に外務省を訪問した。1時間という限られた時間ではあったが、外務省の中に入り、実際に勤務されている職員の方々からお話を伺えたのは貴重だった。さらに、沢山の資料もいただくこと

が出来た。

事前準備で、外務省の任務は大きく5つに分けられると知った。1.日本と国際社会の平和と安定確保 2.開発支援と地球規模課題の解決貢献 3.日本経済再生と国際社会の繁栄追求 4.日本の理解促進 5.「国民と共にある外交」推進 である。いかに多くの任務があるかは想像出来た。単に外国との交易だけではなく、国内の経済発展の任務も遂行しているのだ。私は特に2の開発支援について詳しく質問したいと考えていた。

そして当日、初めに、記者会見室で仙台二高のOGの方からお話を伺った。主に高校生活についての話で、「夢中になって頑張れることを見つけて無我夢中でやり、また、多くの書物を読んで自分の興味のあることや知識の世界を広げることは高校生活で大切」とおっしゃっていた。これはDFやOBOGによる懇談会でも多くあがっていた話だ。実際にこの方は、大学在学中にも多くの本を読まれたそうだ。そのうちに国際法についての興味が湧き、外務省で勤務することを選択したと言う。私も、将来の選択について考えられる程の、多くの本を読んで知識を蓄えたいと考えた。

次に、省内会議室にてもう1人の職員の方からお話を聞いた。UNDPやUNICEFと協力して途上国の開発協力や女性地位の向上に貢献されている方だった。ここでは主に外務省の役割等について詳しいお話を聞くことが出来た。

やはり、外務省で働くためには「英語の技術は必須」だとおっしゃっていた。しかし、帰国子女でなくともこれからの努力で英語力は必ず伸ばすことが出来るそうだ。実際、お話を伺った方も北海道出身で、東京の大学に進学するまではほとんど英語を話す機会は無かったと言う。しかし、それぞれ1年間の中国、アメリカ滞在等を通して外国人との接し方は学べたとおっしゃっていた。

また、国家公務員に求められているものは「国際公益」「国民の生活向上」をいかに考えられるかであるとも聞いた。

外務省で働く一番の楽しみは、やはり外国人と沢山話せる機会があることだそうだ。私は正に、国内外問わずに多くの人と関われる仕事をしたいと思っているため、外務省での仕事に改めて興味を持った。他にも、外務省から国連へ勤務する人も多いこと、外国では日本と違ってパワフルな人が多いのでギャップを感じる人が多いがそれがまた面白いということなど沢山の話があった。

そして私も、「現在特に支援を強化している国や地域は何処か」と質問した。すると、「シリア、特にシリアからの難民支援に積極的だ」という答えであった。今はヨーロッパの先進国だけではなく、途上国へも逃れている難民が多いそうだ。途上国であるため、もちろん職を得ることは難しく、難民支援は不可能に近い。そのため外務省では、それらの難民が多く逃れてきた地域へ支援や寄付をするようにJICAや現地の大統領とも連携を組んで計画をしているそうだ。とても詳しく、わかりやすく説明していただき、外務省の任務の責任の大きさ、そしてやりがいを感じられた。

私は将来、外国でも働ける技術を身に付けて外交や途上国支援に携わりたいと考えている。そのためには、今までの様な甘い考えで勉強することをやめ、さらに明確な目標を設定して努力する必要があると痛感した。今回の経験が出来たことに感謝し、まずは高校での勉強、部活に全力を尽くしていきたい。そして今後も自分の将来についての情報を広く得ていきたい。



